

新人戦の思い出

十六期生 中村 明彦

私が卒業して十二年が経過しようとしているとは、なかなか信じられない心境でペンをとっています。ついこの間の出来事のように思われることが、やはり十二年の年月を経ていざ思い出そうとすると、事の前後関係が、おぼろになってしまっています。が何とか、記憶の糸をたどってみたいと思います。

私が西高卓球部の皆さんに初めてお目にかかったのは、昭和三十六年の三月中旬の事であったと思います。入学式を待つばかりとなっていたあの頃、一日も早く新しい仲間と練習をしたいたいと思いながら、行きつけの卓球場で練習をしていたところ、近所に住んでいた武蔵野三中出身の西島さんという西高の先輩に誘われて西高に出かけたのが始まりでした。大入学入試を終えた先輩達や、進級を待つ現役の方達が、真暗な古びた体育館の中で練習をしていたのを覚えていますが、自己紹介もほどほどに「おい、やろう」と言う先輩達と順ぐりにボールを打ち合い、ゲームをし、何だか入部試験を受けてい

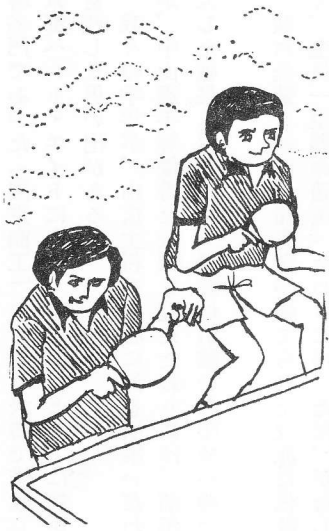
るような心境でしたが、その時の印象は、思っていたより強い人達が西高にもいるんだな、といった嬉しいとまどいであったと思います。

やがて、入学式を終え、多勢の新人部員達と一緒に、ランニング、兎飛び、素振り等の練習が始まりました。週四日の練習日のうち、ボールを打つ機会がほとんど無いという伝統的な西高卓球部での新しい練習が開始されたわけです。中学時代、団体戦で東京都二位の実績を持つ阿佐ヶ谷中の、渡辺・村上の両君を始め、かなりの実績を持つ新入部員が多く、西高卓球部の第二期の黄金時代と期待された時期であったと思います。

この一年生組のデビュー戦は、当時十都立と呼ばれた第三学区の都立戦に始まりました。団体戦優勝、ダブルス優勝。シングルスは、私が杉並高校の宮本氏に負け、第二位となったものの、その後都立戦では良い成績を修め続ける事が出来たと記憶しています。

又対外試合で最も記憶に残る試合は、私が二年生の時の東京都新人戦であったと思います。当時西高卓球部では、二年の秋の記念祭で、一年生とバトンタッチをすることになっており、東京都の新人戦が引退試合ともいえる試合でしたが、私と渡辺君、村上君、安東君の四名のチームで、準々決勝進出を遂げ、ベスト8に残りました。準々決勝では優勝チームの関東商工とあたり、三対二で惜敗しましたが、もうダメか

と思われる試合を勝ち進み、三回戦では、中シードの都立一商にも三対二で勝ち、いっぴくなく勝ちを意識しすぎて関東商工戦で弱気のオーダーを組んだ事がベスト4進出を果し得なかった原因であったと、今も残念でなりません。アンカーとして絶対の信頼がおけ、しぶとさではナンバー1の村上君を始め、超高校級のスケールを持つサウスポールの渡辺君の、高いとあまり入らないスマッシュとか、自分より弱いと思った人には絶対負けない、安定した力を持っていた安東君と一緒に残っている試合であったと思います。残念ながら、目標としていたインター杯などには、代表選手を送りこめませんでした。が、二年間に満たない高校でのチーム作りで、ベスト8まで進出できたことは、ある意味で満足できるものであったと思います。



創立三十周年に寄せて

十七期生 青木 建

いざ、我々が西高卓球部在部当時の頃を思い出そうと試みても、始めて卓球のラケットを握り、先輩の後で球拾いをしながら素振練習をした入部当時から、既に、十三年も経ってしまったのかという感慨の方が先になって、なかなか生々とした場面が思い出せない次第である。そんな訳で、漠然としたものしかご報告できず申し訳けないが、思い出すままに、当時のことを若干触れさせていきたい。

我々が、昭和三十七年四月、西高卓球部の門を叩いた時は、我々の一年先輩が部の中心として活躍されており、中村、渡辺、村上先輩等、中学時代から相当活躍された選手が、部の中軸となつて頑張られていた時代であった。我々新入部員の目には、中村先輩の華麗な「バックハンド」、渡辺先輩の豪快な「ドライブボール」、そして、村上先輩の多彩な「ショット・ツツツキ」が、羨望の的として映ったことを今日でも記憶している。

確か、三十七年秋の「高体連新人団体戦」に於て、我々卓球部（主力選手は、前記三選手と安東先輩だったと思う）